

# 私の太宰

その魅力

2

学して上京するや、今度は短歌にのめりこみ、たちまち「歌壇の龍兒(ちょうじ)」の階段を駆けあがつていった。

一方、青中のころから小説家を志すようになつたと

いう太宰は、この時期、仲間との同人誌などに作品を

書きだす。世に認められる

作品を発表していくのは旧制弘前高校を経て東大文学

部の学生時代からだが、も

ちろん十分すぎる早熟にち

がいはない。そして太宰の

文学の「虚」のもつとも美

しい到達点のひとつである

「思ひ出」は、この青中時

代を物語のクライマックスとしているのである。

なぜ太宰や寺山は、「東京」に出てきた直後から、

それだけに目ざましい文筆

活動を開始できたのか。それは彼がすでに十代の初

年から両親や家族とはな

なかつたということであ

事実この高校時代に寺山

は俳句と出会い、「便所よ

り青空見えて啄木忌」など

多くの句を作り、早大に進

映画館を経営していた親類の家に住み、そこから高校にも通つたのである。

十代半ばの高校生のころは、誰にとっても人生でもつとも多感な一時期といつよい。まして早熟な天才たちにとっては、現実と夢想のはざまで、自らの文学の骨格となつていく「虚実」のありかたに思いをめぐらす時期だったろう。

その身に引きつけて、より興味深い事実にも気がついていた。

それは、太宰も寺山も、

青森市内に家族とともに住む「自宅通学」の生徒ではなかつたということである。

金木から出てきた太宰は下宿生活だったし、太平洋

年春、私は青森高校に進学した。青森高校は旧制青森中学。だから私は太宰治や寺山修司(新制四回生)の後輩ということになる。

両親が蟹田で暮らす私は、高校の正門前の叔母のもとでの下宿生活。そのころには、もちろん、この二人がこの学校の先輩だといふことは知つていた。

そして、もうひとつ、自分の身に引きつけて、より興味深い事実にも気がついていた。

カット・津島園子

戦争で元警察官だった父を失つた寺山は、米軍基地で働く母と三沢で暮らしている。

つき」だの「ネクラ」だのと周辺からやりこめられたり、いたずらに自らを相化されることもない。



たからだと思う。  
もちろん下宿のひとり暮  
れば、それこそ好きなだけ  
创作や読書に熱中できる  
し、作品中に「ウソ話」を  
書きつらねていても「ウソ  
話、家族が同居していなけ  
たままだと思う。

たまたま青森という本州最北端の地に生まれ、そだち、おまけに市内の子でなく、下宿しながら進学校に通学したことによって、彼らは、それそれにいちばん独自の「虚」の世界を見つけ、その語り口のレッスンに着手することができたのである。

(ノンフィクション作家)